

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI



2019 ARTA DIGITAL Rd.7 SUGO  
HIS SPEED WAS BEYOND THE IMAGINATION

「想像を超えた速さで、悲願へ」



ARTA が戦うスーパー GT の 2019 年シーズンは残り 2 戦を迎え、最終決戦へ向け最後のふるいにかけられる。そんな戦いの前に、またしても雨。魔物の棲むと言われるスポーツランド SUGO であるだけに、荒れた 1 戦になることは間違いなさそうだった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



 **AUTO**

 **AU**

**ARTA**  
PRIVATE  
SUPPORTERS  
CLUB

 **ART**  
RACING  
TEAM  
AGURI



**AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI**

**ARTA**

スターティンググリッドに並んだ各車がスリックかウェットかとタイヤ選択に迷う中、GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT も GT300 クラスを戦う 55 号車 ARTA NSX GT3 もウェットタイヤに履き替えてスタートに臨むことを決めた。星「そこそこ降ってきてるからウェットの方が良いかなという気がする。ドライでいってもそのまま遅れていくだけっていう気がするから。ウェットで行くなら富士で使ったのにするかもうひとつ硬いのにするか。できれば 27 ラップ行きたいなと思ってるんだけど」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

伊沢「硬くて外すくらいなら柔らかい方に外す方が良いと思う。富士と同じヤツ」

星「じゃあウェットタイヤで行きますか？」

伊沢「みんな換えている感じ？」

星「前の方は換えてるけど、後ろの38や23はまだスリックのまま。

100はウェットで17はコンパウンドを迷っているところみたい」

伊沢「3号車は？」

星「3はウェット、17はドライだね。今23もウェットに換えました。ドライは3台だけ。SCスタート決定です」

伊沢「今の路面で言うとドライタイヤは100%ないね」

ウェイトハンディが半減されてもなお31kgを搭載する8号車の伊沢拓也は9番グリッドからのスタート。

エンジニアの星学文とのやりとりでウェットタイヤに決めた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

一方、クラス最多の42kgを積む55号車は、それでも強力なペースでフロントロウを確保して高木真一がスタートドライバーを務めた。ドライタイヤで苦戦するGT500クラスよりも速い高木は、ライバルの動きを見ながらペースをコントロールする余裕さえあった。そのくらい55号車の仕上がりは良かったのだ。エンジニアの一瀬俊浩と相談しながらペースを決めていく。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

高木「500 って全車ウェット？ ペースが遅いよ!？」

一瀬「何台かはドライ。2位は56号車、11秒後方」

高木「やっぱり磨耗的には左フロントだね。残り周回数だけ教えておいて」

一瀬「了解。ミニマムまではあと16周。今28秒台で走っているのは1台だけだから、29秒台までは落としても大丈夫だよ、タイヤを守って。56号車から後ろは31秒台。メインストレートの雨量が増えてきた」

高木「他のラップタイムを教えて。合わせて走るよ」



一瀬「速いのはLEONで30秒3。後ろの4号車は30秒9。今後ろとの差は12秒ある。今の状況ならそのペースでOK」

高木「タイム上げる必要があるなら上げられるからね、残り周回数で言って」

一瀬「了解。ペースが良いから基本的には引っ張る方向で行きます」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



一瀬が後続とのギャップをチェックしながら、高木にペースコントロールの指示を出す。それと同時に乾いていく路面コンディションと雨雲の様子とも睨めっこしながら、次のスティントに向けた戦略を考えなければならない。

一瀬「高木さん、4号車とのギャップが9秒になってきたからちょっとプッシュしようか。この周でミニマムでいつでもピットインできるからタイヤのことは気にせずに」

高木「了解。結構プッシュしてるよ？」



AUTORACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

一瀬「良いペースです。これキープで行けるところまで行きましょう。タイヤの状況はどうですか？ 無交換でも行けるとか？」

高木「ライン上は大分乾いてきてるから、無交換は無理だな。1つ硬くても良いと思う。この後の雨量によるね。まだ降りそうだったら今のタイヤ。ムービングはむっちゃしてる、すごいよ」

一瀬「了解。SC リスクもあるからもしかしたら40周くらいで入れるかもしれない。ストレートはまた雨が増えてきた」

高木「そうだね、全体的に増えてきてるね。SCだけ気をつけよう」

セーフティカーが入るとなれば、ピットレーンが閉じられる前にピットに飛び込まなければ大きなロスを喫することになる。マシンが完璧な速さを持っているうえにチームとドライバーが完璧にコントロールできている55号車にとって、心配しなければならないのはクラッシュや急な雨脚によるセーフティカーという外的要因だけだった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



S. Takagi N. Fukuzumi RACING FOR ENTICING

AUTOBACS  
オートバックス

HONDA

ARTA

AUTOBACS  
55  
ZF zf.com/jp

CVSTOS BRIDGESTONE

PITPRO

Z

e-Call ED

WORK COM RAY



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

一方、ウェットタイヤでスタートした伊沢の8号車は、一旦は6位までポジションを上げたもののトラクション不足に苦しんでペースが鈍り、10位まで後退してしまった。

伊沢「速いコーナーは良いんだけど、小さいコーナーで全然リアがない」

星「内圧はどう？」



伊沢「リアはちょっと下げたいかな、トラクションがないから。硬い方で行く？」

星「硬い方にしようかなと思います」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



再び雨量がじわじわと増え始める中で、早めのピットインを決意し野尻智紀にドライバーチェンジを行なう。

星「ここからちょっと長いけど頑張って行こう。まだトップと同一周回だからね。ターゲットは10秒先の12号車です」

野尻はタイヤのウォームアップに苦しんでなかなかペースが上がらない。

星「ちょっと雨量が増えてきているけど、(タイヤが)温まらない感じ？」

野尻「はい」

星「グリップしない？」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



野尻「そうだね～、300 を抜きに行くのも大変なくらい。1人で走ってればもう少し温まると思うけどそれがツライ」  
周回遅れにされ、行けても最高で9位という厳しいレースになってしまった。

そこでエンジニアの星はソフトなタイヤに履き替えてアタックする戦略を提案する。もはや失うものはなかったからだ。

星「残り28周あるから、一番柔らかいのに換えて追い付くようにしようか。このままじゃ厳しそうだから」

野尻「はい」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

T. NOJIRI

レース終盤はトップと同等かそれ以上のペースで周回を重ねた野尻だったが、時すでに遅し。

8号車は結局 12 位でレースを終えることになった。

星「お疲れ様でした、ポジション 12。最後は雨量が少なくなってきたのが合っていたということ？」

野尻「そういう感じはあるかな。柔らかいけどグリップは何も変わらない感じだったから。

すいません、もてぎ頑張ります……」

星「頑張りましょう、もてぎで」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

そして高木のドライブする 55 号車はトップを快走し続けていたが、36 周目に恐れていた事態が起きた。GT500 クラスの車両がコースオフして止まり、セーフティカーが出動するかもしれない。それを見て一瀬が瞬時に無線で高木を呼び入れた。高木が走っていたのは最終コーナー。まさに間一髪のピットインだった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS



一瀬「入る、入るよ！ SC が入るかも知れないからピットインしよう！」

高木「了解、今最終コーナーだよ」

ここでステアリングを託された福住仁嶺は、まだスーパー GT での勝利経験がない。

そんな福住に土屋圭市エグゼクティブアドバイザーが気を引き締めるようアドバイスを送る。

土屋「タイヤ冷えてるから気をつけて」

福住「SC 入ってるんだよね？」

一瀬「そう、入っている。雨量が増えるかもしれないからタイヤは高木さんと同じのを着けたよ。LEON も同じタイミングで入ってる」

福住「ああ～、向こうも速いだろうなあ」

一瀬「そうだね、さっきのペースを見ると速そうだね」

土屋「ドライバー勝負だぞ！」

福住「LEON は何台後ろ？」

一瀬「3 台後ろ。ちょっと雨量が増えてきてるからね。

でもこれで行くしかないからプッシュして温めて」

福住「タイヤ全然温まらないよ、これヤバイよ。全然グリップしないよ、本当にさっきと同じタイヤなの？」

一瀬「頑張れ、頑張れ。タイムはみんな一緒だから大丈夫」

土屋「仁嶺、集中していけ！ 水の少ないところを狙え！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



福住はここから好ペースで周回を続けて行く。しかしこれがまたひとつ悩みの種になった。燃費が苦しくなってきたのだ。GT500 クラスのペースがウェットコンディションで遅く、想定していたほど周回遅れにならなかったことでGT300 クラスとしては走行しなければならない周回数が増えてしまったからだ。

一瀬「後ろとのギャップは6秒あるから、ちょっとコントロールしていこう。燃費もちょっと管理して欲しい、少しリフト&コーストして」

福住「了解」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

一瀬「500と同じペースで走ってるから周回数が予定より多くなりそうだから」  
コーナーの手前で早めにスロットルペダルをオフにし、なるべくペースを落とさないようにしながら燃費を抑えていく走りに徹する。

燃料消費量と残り周回数を突き合わせながら、ギリギリまで燃費をコントロールしていく。

一瀬「OK、ペースは良いよ。後ろとのギャップは7.3秒」

福住「燃費はどんな感じ？」



一瀬「まだ結構ギリギリかな」

福住「リフト&コースト結構やってるけど、タイム的にはどうなの？大丈夫なの？」

一瀬「タイム的には大丈夫」

福住「燃料はまだ足りないんでしょ？」

一瀬「今後ろに3号車がいて、それに抜かれれば大丈夫だと思う」

福住「フルプッシュして良い時は言って」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

タイヤとコンディションが合わずペースの遅い GT500 クラスのマシンに引っかかるが、燃費のことを考えると抜くために無理にプッシュするわけにも行かない。難しい状況に置かれて焦れる福住だったが、最後は溜まらずスロットルを踏み付けた。一瀬「残り12周、後ろの4号車とのギャップを見ながら走ろう。今5秒ある。1秒前でゴールすれば良いから、なるべく管理しよう」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



土屋「なるべくアクセルオフを長めに！」

福住「やってるよお〜。前の500が邪魔なんだけど、どうするのこれ？」

一瀬「遅かったら抜くしかないね」

福住「燃費は安全圏に入ってるんでしょ？俺もう行くよ!？」

一瀬「OK、OK。良いよ、使え、使え！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



しかし燃費が厳しいのは後続も同じ。結局最後まで福住に追い付いてくるライバルはおらず、最終的に 15 秒も引き離して独走のトップチェッカーを受けた。ARTA のピットガレージは歓喜に包まれ、ホッと一息の福住からもようやく嬉しそうな冗談も聞こえてきた。

一瀬「優勝だ、優勝！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



福住「良かったあ〜、最終戦の前に勝てて良かった。  
今回はクルマが最高だったね」

土屋「お前もよく燃費セーブしたよ。本当に良い  
仕事したよ、100点！」

福住「ありがとうございます」

土屋「疲れたろう？」

福住「ちょっと腰が痛いですね（笑）」

土屋「俺と鈴木亜久里が揉んでやるよ（笑）」

福住「やっぱり昨日牛タンを食べなかったのが良  
かったのかなあ。あそこでタイヤの選択も良かっ  
たと思う。最初はキツかったけど良い選択だった」

一瀬「あのタイミングでLEONは全然タイムが出  
てなかったからね、仁嶺の頑張りだよ」

土屋「お前が500より速く走るから燃費がキツク  
なるんだよ！（笑）」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



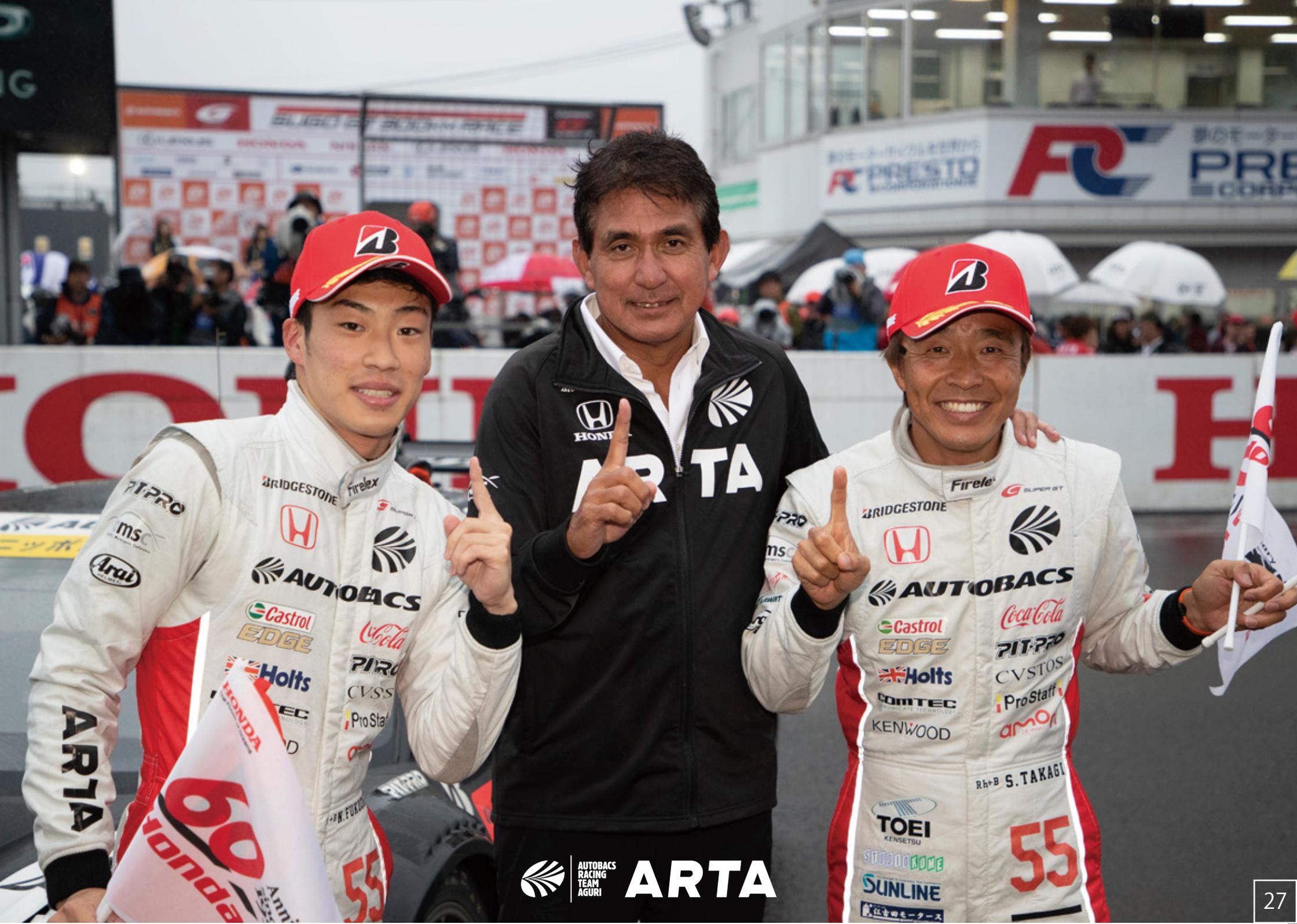
燃費が厳しくなるほどの予想以上の速さで今シーズン初優勝。これで2位に14.5点もの差をつけランキングトップで最終戦に挑むこととなる。そしてもてぎではウェイトハンディが降ろされ、足枷のない状態で純粋な勝負をすることができる。悲願のタイトル獲得へ向け、高木と福住、そしてARTAはとてつもなく大きな一歩を進めた。あとは一歩、本当に最後の一歩を前に進めるだけだ。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

Rh+B S. TAKAGI



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



BRIDGESTONE

POTENZA

PIT-PRO

BRIDGESTONE

AUTOBACS

amsc

Castrol  
EDGE

Holts

COMTEC

KENWOOD

Fireflex

BRIDGESTONE

Castrol

AUTOBACS

EDGE

Holts

PIT-PRO

CVST

ProS



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



ARTA RACING TEAM AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998 AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT, ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



株式会社オートバックスセブン

# ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998  
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED  
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,  
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

**ZERO**  
BORDER  
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD